

人口流出にストップ！地域から発信する若者たち

自分らしく生きやすい地域とは

人口減少。それは大きな社会問題のひとつで、青森県も例外ではありません。令和2年までの5年間の「転出超過」が全国最多となる3万696人を記録し、特に若者の人口流出が止まらない青森県ですが、県外から移住を果たし、県内で精力的に活動をしている若者たちがいます。今回はその方たちから、自分らしく生きやすい地域のヒントを探ります。

八戸圏域に戻ってこい！ 女性3人組の情報発信ユニット「海猫ふれんず」



編集スタッフの小田桐咲(左)と平沼日菜子さん(右)撮影はなつめさん。3人そろって海猫ふれんず。

「海猫ふれんず」の発足

クローバーおもり編集スタッフの小田桐が所属する「海猫ふれんず」は、八戸圏域の魅力を伝える情報発信活動をしている女性3人組ユニットです。特にSNSでの情報発信を中心としており、令和2年10月から現在まで、約40件の動画を投稿しています。

海猫ふれんずのメンバーは全員同級生で、一度地元を離れ戻ってきたUターン移住者、Uターンした理由はメンバーそれぞれですが、一度離れたからこそ地元の魅力を知ることができたという思いは同じでした。

「地元で何か面白いことをしたい」との共通の思いから、当初は魅力発信を目的として活動していましたが、活動していく中で、その魅力を創り、守ってきた人がいることに気がつきます。

魅力紹介からワークショップ開催へ

今ある「青森県の魅力」は誰かが創り、受け継いできたもの。これからも、誰かが受け継いでいく。一体誰が？ そんな問いが生まれた時、地元を離れた若者たちに戻ってきてほしいという思いが生まれました。そこから、私たちは活動の目的を「青森県への移住促進」にすることに決めました。

その後、八戸市の「元気な八戸づくり」市民奨励金制度を活用し、ふるさと納税をテーマとした高校生対象のワークショップを実施しました。人生最初のキャリア選択の場に立つ高校生にこそ、将来的な地元との関わり方を考えるきっかけを持つてほしいからです。

活動開始から約2年。ようやく「海猫ふれんず」としての原型を形作ることができてきたと思います。少しずつ認知度も高まり、配信を見てくれる人や協力してくれる人も増えました。

青森県では、後者の「社会減」が大きな課題になっており、令和4年3月の総務省の国勢調査に基づいた人口移動の統計では、令和2年までの5年間に青森県に入ってくる転入者数より青森県を出ていく転出者数が上回る「転出超過」が全国最多となる3万696人となりました。

人口が減ると、公共サービス・公共交通機関の確保や維持が難しくなる、地域コミュニティが機能しなくなる、地域文化や伝統文化の消滅など、様々な問題が発生してしまいます。

転出の理由としては、進学や就職など様々かもしれませんが、特に10代後半から20代の若者の転出が多くみられます。

最近では、コロナ禍で若い世代の地元就職や地方暮らしに関心が高まっており、県内定着への期待も膨らみます。

青森県の人口について

人口の増減には2種類の要因があります。死亡数と出生数の差による「自然増減」と、転出者数と転入者数の差による「社会増減」です。

漁師に恋して佐井村に移住！ 大畑彩美さんが語る佐井村の魅力とは

おお はた あや み
大畑彩美さんが語る佐井村の魅力とは

YouTube 海猫ふれんず 検索



大畑さんのクラフトビール販売会の様子を「海猫ふれんず」のYouTubeチャンネルでご覧いただけます。こちらからどうぞ➡



自慢のクラフトビールを手にお客さまにPRする大畑さん。

漁師に恋して佐井村へ！

最初に紹介するのは、佐井村在住の大畑彩美さん。出身は福島県会津若松市。進学を機に青森県へ移住し、大学4年間を過ごします。その後、大学院進学のために一度福島県に戻りますが、就職のタイミングで青森県へと再度移住。就職先は地方新聞社でした。本社を含め県内で勤務していましたが、大畑さんの人生の転機は、むつ市への異動により訪れます。

北地方の取材を担当していた大畑さんは、佐井村にも度々取材に訪れていました。その時に出会ったのが、現在のパートナー、佐井村独自の制度である漁師組事業に携わる漁師さんで、大畑さん曰く「ピピッときた」とのこと。めでたく結ばれ、令和元年5月に佐井村へ移住しました。現在は一般社団法人くるくる佐井村に勤め、佐井村独自のクラフトビール作りに従事しています。

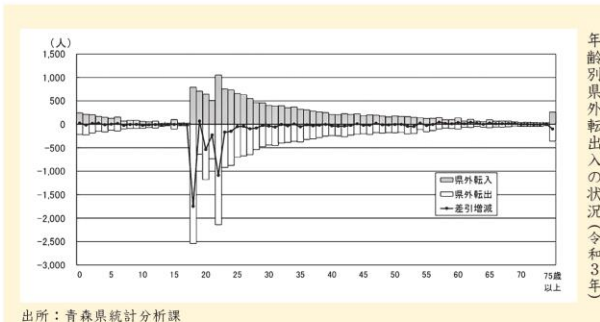
佐井村の魅力

大畑さんが佐井村に移住して約3年半。佐井村の魅力は、村民一人ひとりが村への熱い思いがあり、それを行動に移すエネルギーがそこにあることです。地方新聞社で働いているときから、面白いことを生み出していけそうな村だと感じていたのですが、その予感の中に入っていました。平成28年にNPO法人「日本で最も美しい村」連合に加盟した佐井村は、平成30年には「日本で最も小さくかわいい漁村」というビジョンを掲げました。28のアクションプランのひとつが、大畑さんが担当しているクラフトビール作りに向けた活動なのだそうです。佐井村で育てたホップを使った委託醸造で、クラフトビール商品が誕生しました。

ビールの原料となるホップは、令和元年に休耕地を利用して栽培が開始されました。育てているのは村の有志たち。多い時には40人も人が集まって、ホップを育てているそうです。目的はクラフトビール作りを通して村に活気が生まれること、クラフトビールの流通によって村のことを知ってもらうこと。そして村のビジョンに近づいていくことが真の目的なのです。

今後の展望

今後も新しいことや面白いことに挑戦したいと答えてくれた大畑さん。一方で、ワークショップやパランスのライフも大切にしていきたいと話します。更に佐井村には、ライフを大切にできる「豊かさ」がある。大畑さんは言います。佐井村では、伝統芸能や集落ごとの行事な



ども賑々と受け継がれています。伝統芸能や地域行事は、その運営を担うことで負担が増えますし、「やらないこと」を選択することもできます。ですが、それを続けている佐井村の人たちには、時間の豊かさがあり、心の豊かさがあり、そうして繋がった人間関係ややはり豊かなものになるでしょう。

古くからある地域資源を大切に、そこから新たに面白いことに挑戦していくこと、佐井村でそれができる。大畑さんと佐井村のみなさんの「日本で最も小さくかわいい漁村」への挑戦はまだまだ続きます！

なが おやす たか エンジニアからりんご農家に！長尾泰孝さんの挑戦



ご自身のリンゴ畑を背景に。

「IT業界からりんご農家に転身」
長尾泰孝さんは青森市出身で、大学進学を機に上京。コンピュータが好きで、プログラミングが趣味だったことから、卒業後は都内のIT企業に就職しました。しかし、現在は、青森市浪岡に移住し、りんご農家に転身！令和4年の4月に独立し、約3ヘクタールの農地を経営しています。

「そうだ農家になろう！」

会社に勤めているうちに、自分で事業をやってみたいという気持ちが生まれてきたという長尾さん。もともと植物が好きだったこともあり、農業に目をつけていたそうです。地元の特産品ということもあり、りんごについて調べていると、その栽培技術に心惹かれました。長尾さんはもともと新しく変化していくものに興味があり、コンピュータやブ

ログラミングの世界に惹かれたのも、その変化の速さに惹かれたからだそうです。青森県のりんごの栽培技術は全国的にも進化を遂げており、まさに今、りんご産業は変革の時期を迎えているのだそう。それを知った長尾さんは、農家に転向する不安よりも、りんご産業に挑戦してみたいという意欲が勝り、りんご農家になることを決意しました。

ゆかりのなかった浪岡へ

農家になることを決意し、あおもり農業支援センターなどの相談機関を回り、その中で、地域県民局から現在の師匠であるりんご農家を紹介してもらいました。青森市浪岡は、佐井村の漁師縁組制度のように、農家になりたい若者を研修生として受け入れ、トレーナー農家のもとで修行し独立までを支援する制度が整っているそうです。

トレーナー農家のもとで修行ができるこの制度は、長尾さんのような若者にとっては、助けとなる便利な制度なのです。長尾さんの他にも何名かこの制度を利用して挑戦している若者があり、今年も女性が1名、独立を果たしたそうです。「なんでも相談ができる」そこがこの地域で農業をする魅力だと長尾さんは言います。

「ITとりんご」の共通点

「ITとりんご、一見正反対のようですが、実際には共通点もあるのだそう。それは、「やった通りにしかない」とい

うこと。コンピュータも植物も、与えられた条件で動くものだといいます。その条件、すなわち環境を、いかにして整えるかが自分の仕事だと長尾さんは話します。ITとりんごでは、時間のスパンが大きく異なりますが、その変化は着実に起こっています。自分がしたことがそのまま返ってくるその変化を楽しむことができるのは、ITもりんごも同じです。

今後の展望

農業の面白さにとことんハマっている長尾さん。将来的に、農業を生業としていける人を増やす手助けができるよう、ご自身のりんご園でも、繁忙期だけではなく、ネットを利用した通販サイトの立ち上げなどにより、通年雇用で積極的に取り組んでいきたいと語ります。そして、りんご園で働いていく人がストレスなく働ける環境を整えることが今後の展望だそうです。



りんごの実の間引き、「実すぐり（摘果）」作業の様子。

▼取材を通して：「今回、佐井村と青森市浪岡で活躍するおふたりを取材してきました。大畑さん、長尾さんのおふたりが自分らしく人生を選択している様子が印象的でした。」

人口流出は若者、特に若年女性の流出が多い傾向にあります。青森県では自分らしく生きられないと思われているからなのでしょう。

「女性らしく」「男性らしく」「こうでなければならぬ」「等、固定されたイメージではなく、自分らしく選択できる。地域の寛容さがポイントなのかもしれません。」

個に焦点を当てた生き方が主流になってくる現代。おふたりのように、不安や心配を乗り越え、自分らしく挑戦している若者たちが、青森県にも実はたくさんいるのかもしれません。

これから「海猫ふれんず」の活動を通じて、地域で活躍している人たちに会いにいきたいです。

そして、青森県は若者にとっても魅力的な地域なのだと思ってもらえたら嬉しいですね。

（取材：小田桐 咲）